録音（昭和四十二年九月二十一日）　広島会館

親鸞聖人は難しいと教えておられる。難中の難これに過ぎたるはなしと仰っている。そうすると、真宗の人達は、あれは邪見憍慢の悪衆生だから難中の難と教えられたので、私らは素直に聞いているからという。素直に聞けと言っている坊さんも素直ではない、聞いている同行も素直ではない、説教を聞いているときだけ猫を冠っているだけ、本当の素地のまま、こけ込むままが唯じゃったという時が、素直に聞いている。

私は素直に聞いているというけれども、話を聞いているから、み易い、説教を聞くときは猫を冠っているから、み易い、実地になってごらんなさい。

邪見とは誰の事か。**邪見**とは十九願の観無量寿経の桁にいる人、真宗の同行ですよ。いよいよぎりぎりの境地に立ったら、信仰はそんな生易しいものではない。三千世界の者は皆助かっても、私一人は助かる柄でなかったという往生の望みの綱が切れたときが、機の深信ということ、その境地まで進んだか。三千世界の者は助かっても、私の往生は駄目だったと望みの綱が切れたというのが機の深信、今知ったかい、十劫已来見抜いた親が我よく汝を護らんと突き抜けた時、三千世界の者は皆堕ちても、私が助からなかったら親が泣くという自覚がつく。それが法の深信。絶対と絶対ですから両極端です。善も欲しからず、悪も恐れなしという、善悪を超越した世界が有るぞというと、凡夫にそんな大きな喜びがあるかと悪口をいう、法の不思議さのわからないのが邪見の人間。凡夫にそんなはっきりしたことがあるかというが、聖人はあると仰ってあるではないか。

御和讃に、何と書いてあるか、「**無碍光如来の名号と　かの光明智相とは　無明長夜の闇を破し　衆生の志願をみてたまう**」、光明無量の働きが破闇、寿命無量の働きが満願、破満の徳が名号にあるというと、勧学があれは名号の具徳、そなわった徳であって、顕徳でないという。仏智満入したら顕徳ではないか、無限の喜びが出て来る。世界中の果報者は私一人であるという大満足があるというと、そんなことが凡夫にあるかという、法の不思議さがわからないから邪見という。

憍慢とは、二十願の桁、阿弥陀経の桁、名号に眼がついた人のこと、わしら素直に聞いていると言っている、どこが素直か、話に聞いているから易いのです。あなたは、諸仏に嫌われ、第十八願から洩れているのですよ。

十八願の上で、**唯除五逆誹謗正法**。五逆の者と法を謗った者は除く。

親殺し、あなた自身が親を殺していないか。七十、八十になってよぼよぼしてごらんなさい、いつまで生きているのかと心の中で何遍殺しているか。働きのない人間が、ぐずぐず言っていると思ったことは無いか、子供や孫には贅沢させているのに、親を養うのが邪魔になるような根性が、五逆、親殺しの罪人という反省もせずに、それがはっきり照らしだされ

たら、極悪最下の取柄のないものと知らされ、仏智の不思議に生かされたという処にでなければならない。それが、素直に聞いていると自惚れているから、機の深信がかけている。邪見は、法の不思議さが判らない、法の深信がかけている、憍慢は機の深信が欠けている、二種深信が欠けているから、どっちも参れない。邪見憍慢の悪衆生は信楽開発することは難中の難と言われた。首だけは十八願に突っ込んでいるが、足は入り口の処にいるから、素直に聞いているというが、二十年聞いても三十年聞いても、実地を通っていないから大満足の境地に出れない。

私がいよいよ乗り上げて、自分の機ざまが照らし出されたとき、こんな心がおるとは知らなんだと、これを導く知識はいないかと、ジリジリ舞いする程求めた。卒業間際に信仰の煩悶を起こしたから、苗村という友達が、「このごろ村岡（和上の旧姓）はどうかしているぞ、変になったぞ、思案ばっかりしているが、神経衰弱でなかろうか、何かに憑かれているぞ」憑かれているはずよ、阿弥陀様に憑かれている。いよいよ真剣に求めれば、自分の悪性が見えて来て、学校はやめようか、卒業論文は五年七年遅れてもかまわない、後生の一大事は、一息の解決じゃが、どうしようか・・・今までの素直な、有難いというものは、吹飛んでしまった。それはご教化じゃないか、話じゃないか、この実地の腹底がどこで片付くか、実地問題になってきたのです。

あなた方は、この境地を通らないと死ぬる間際には、信仰がごじゃごじゃになりますよ。話で片付けていてはつまらない。実地の腹底がにっこり笑うたか。真剣になればなるほど知らん顔している。やめるにもやめられず、進むにも進まれずという、これが善導さまの教えられた、行くも死せん、とどまるも死せん、帰らばまた死せんの境地になっている。

こんな難しい宗教があるか、母親が坊さんにしたばっかりに、こんなに苦しまねばならない、と親の意思に背いているのが、親殺しの五逆と言う事に気がつかない、どこに他力があるのか、八千遍の御苦労と言うが、どこに法の不思議さがあるのかと、逆ねじかけているのが謗法の罪を犯している、そんなにあわてているのに、腹の底は、まだ死にはせんと信のないのが、闡提という、無信と訳す、一つあっても助からないのに、三つとも腹底の秘密の部屋に隠しておりながら、これには用事はないと、上の方だけニコニコして、素直に聞いたと言っている。

感情と腹底と二つにはっきり分かれて、感情は理屈や算用があうが、腹底は言う事聞かない、難化の三機、難治の三病という、教化の出来ない、療治の出来ない心がある、これがあるから三世の諸仏が逃げたのか、これがあるから流転をしている。業にひかれて堕ちていかねばならないか、今の一息が危ないと、往生の望みがぷっつり切れたとき、黒煙の中に、ぐーとこけこむ思いがしたとき、我よく汝を護らんの呼び声、これを無条件というのか。欲がや

みません、怒りがおさえられません、愚痴がこぼれます、三毒の煩悩が膿血のように流れて来る、それを見抜いた親ぞ、それが唯だと言われた時にくるりと向きが変わった、決定、必定堕ちるに疑いなし、助かったという大自覚ができたとき、明信仏智、十方法界わが物なり、三千世界わがものなり、私が行かなくて誰が行くかいと、はっきり晴れる。明らかな知恵をもらったから、因果の道理をはっきり知らされて愚痴がなくなり、無条件で生かされた嬉しさからは、不安が無くなり、愚痴のない不安のない喜び。聖人さま、七百年の古にこんな広い天地を体得されたから、八方総攻撃の中にたちながら、死に行く人々の批評ぐらいで後すざりできるかい、死なぬ仏に遇うたのが幸せと大満足でお通りになられたのですか。

七百年後、私もこういう広い天地を体得さして頂いたのは、あなたのお陰でございます。ここまで導いて下さって、晴れた世界を教えてくださらなかったら、私も真剣に求めることはなかったが、今は善も欲しからず、悪も恐れなし、南無阿弥陀仏の独り働きに満足して、ようしやりぬくぞ、一切の向きを変えてあげて、現在で助かる法を弘めなければ申訳がないと続けて来ているのであります。どうぞ、晴れない世界があって悩んでこそ、晴れた世界があるということを考えて進んでいただかねばならないのでございます。